



Raffiné Journal vol.24

目に宿る意志

表現は、
準備された形として現れることが多い。

けれど、ときどき
その枠から少しだけ溢れる瞬間がある。

それは作られた動きよりも、
なぜか自然に見える。

あるアーティストのステージを見ていたとき、
ひとつだけ、胸に残る瞬間があった。

用意されていた表現とは、
少し違って見えた。

即興のようにも見えたが、
思いつきの動きとも違う。

その瞬間、
ここでこう表現しようという意志が
はっきりと乗っていた。

そう感じたのは、
その人の目がそう言っていたからだった。

ステージの表現には、
振付や演出として整えられた形がある。

長い時間をかけて磨かれ、
再現できる表現として準備されている。

だからこそ、
その流れの中で少しだけ違う動きが現れると、
自然と目に留まる。

その表現には、
確かに意志があった。

けれどそれは、
計算された演出の意図ではない。

その瞬間までに積み重なってきた熱量が、
そのパートに触れたとき、
意志として立ち上がったように見えた。

長く表現を続けている人ほど、
身体の中には
言葉にならない蓄積がある。


練習や経験、
その時々感じてきた感情や熱量。

それらが重なり、
ある瞬間に
表現として滲み出ることがある。

表現は、
その場で選ばれるものではない。

内側に積み重なってきたものが、
ある瞬間、選ばれてしまう。

そのとき、
人は“表現している”のではなく、
すでに現れている。



その目は、選んでいない。
もう、決まっている。



R.

Raffiné Journal vol.24
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné